



第31号



ECOMAIL '0

会費値上げについてのお知らせ

この関西ECOMAILは、創刊の第1号 1990年8月10日発行以来5年9カ月の間、通信費年1000円で賄って参りました。

しかし、年間1000円の通信費では各月発行のECOMAILとワークショップ案内の葉書（年間ほぼ6通）にかかる郵便代、用紙代、封筒代、宛て名ラベル代、編集にかかる連絡費（原稿の郵便代等）などを計上することはできません。そこで、1996年度より（5/1～）1500円に値上げすることを世話人会で決定致しました。

なお、第29号にてお知らせしましたように、支部規約が施行されましたので今までの通信費を「会費」とし、日本環境教育学会の会員以外の方には、「購読費」として納入していただきます。

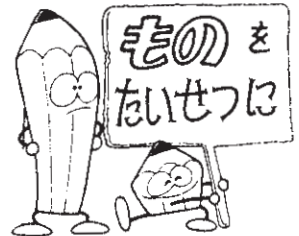
以上、よろしくご了解いただきますようお願い致します。また、不明な点がございましたら、事務局までご連絡ください。

（通信費振り込み先：日本環境教育学会関西支部

郵便振替口座 00990-5-37886）

第31号 目次

- ・連載企画<阪神・淡路発！被災地は今>
第5回 私の兵庫県南部地震体験
（菊地泰博 当時兵庫県庁所属）…2～3
- ・第45回 ワークショップ（11/25）の記録
「高等学校での環境教育の実践事例」（田先崇志 社高校）4～5
- ・第46回 ワークショップ（1/13）の記録 II
「種の絶滅」（小浜由美子 ネットワーク『地球村』講師）…6
- ・関西ECOMAIL通信費納入者へのお知らせ …7
- ・第48回 ワークショップ（3/9）「環境教育をヒトの原点
で考える」 講演要旨 （山田卓三 兵庫教育大学）…8～9
- ・ネットワーク「すいた環境教育フェア'96」のお知らせ…10～
I II III 「タンポポが語る大阪の自然」「滋賀大会」
「酸性雨データ」「エントロピー学会」など…12



田先さん、小浜さんの記事の掲載が遅れたこと、広報委員会の不手際です。
お詫び致します。お許しください。

私の兵庫県南部地震体験

菊地泰博（当時兵庫県庁所属）

地震発生時はまず、自分自身の生命の安全、ついで、家族の安全の確保を行った。震災の状況については多くの記録書、写真集が出版されており、それらにより全体像はつかめる。そこで私は、これまでの人生で経験しようもなかった人生観も変わるほどの私的な体験談を震災にたいする防災教育、環境教育の知恵として御紹介します。

1. 被災時の状況

自宅は激震地に近接した神戸市中央区の夜状化で有名になったポートアイランドにある。人工島の周辺は破滅的な被害があったが、中央部の住宅地は高層建築物が多いため支持杭は深く、多く配置され、一応倒壊は免れた。しかし、地獄のゆれであった。

当時の状況は次のとおり（神戸弁に表現）：まだ夢の中にあった。マンション全体を怪物がゆらしているようで、「何をするんや！」とうめいたところで目をさました。

落下物による怪我を防ぐため必死で次男にかぶさり、別室の長男に「生きとるか！」とどなった。妻はフトンをかぶり泣いていたと思う。家族の無事を確認した後、自分のベッドの周囲を見ると、近接して本棚、食器棚が倒れこんでおり、家具前面のガラスが破碎、散乱していた。危機一髪で事故から免れたらしい。倒れた家具、ガラス、本などが避難すべき廊下をふさいでいた。裸足の足では危険であると判断し、それらをかき分け、スリッパを探し、家族に配ったところで（地震でなく自身の）震えがきた。

幸い家族全員、怪我はなく、それだけでも有りがたいものと感謝している。この一瞬の出来事により、見栄えのよい家具の危険性、退避通路の確保、防災用具の確保等平時では得られない多くの教訓を得た。

2. 県庁舎の状況

私が勤務している県庁は激震地の中央区JR元町駅の北方の高台に位置し、事務所は13階建の県庁1号館の6階にあった。地震発生当日は交通遮断、家族の安全確保等のため出勤できず、当日の出勤者に聞くと、ロッカー類が南向きに倒れ、書類が散乱し一部ガラス窓を突き破り、壁、床の一部に亀裂ができていた。一部の事務所では亀裂した箇所から青空が見えたらしい。執務時間中に発生していたら大惨事になったであろう。

地震に関連した県職員の死亡5名、家族20名、全半壊450件であった。

自身は、家族に怪我はなかったが、自宅は半壊より程度の低い一部損壊扱いであった。特に家具、食器は全壊に近かった。

庁舎、各事務所は応急処置され、同所で約1年間執務していたが、平成8年1月頃より全面補修が決まり前広場に仮設事務所を設置し、交互に改修していくこととなった。

3. 震災関連業務について

私自身は環境保全いわゆる公害防止行政関係の技術職員であり、環境局の自動車環境対策にかかわる業務を担当していた。環境局としては、震災における緊急業務としての直接的な分担業務は無く、その他の雑事担当として位置付けられた。

私自身が経験した主な業務は、次のとおりである。

(1)緊急業務として

①避難所パトロール

小学校、公園にある避難所における状況把握、仮設トイレの設置、仮設住宅入居等生活要望の聴取のためのパトロールを行った。

避難者の話として印象に残ったものは、「仮設住宅は、自分が住んでいた震災消失した跡地に設置してほしい。人道的な扱いをしてほしい。」

②被災地の風圧被害苦情の処理

激震地内の神戸市灘区内の王子競技場が緊急物資集結場となり、応援要請された自衛隊の駐屯基地となった。さながら戦場化していた。

自衛隊の物資輸送用大型双発ヘリの風圧が直下では、震度2程度の振動があり、飛行コース直下では、被災した家屋の瓦がずれ、家屋の倒壊の恐れがあった。

また、避難所のテントが風圧で引きずられ、けが人が出る等二次災害の対策、ヘリの飛行経路の変更指示等苦情処理を行った。

ずりおちた防水シートを修復するため、瓦の落ちた屋根に隊員とともに登らざるを得なくなり、隊員は緊

急時の装備がなされていたが、職員は携帯電話のみで無装備で対処していた。今から思うとよく事故がおこらなかったのだとひや汗がでる。

③災害救護班の宿泊手配等

大型客船、フェリーを宿泊用ホテルに仕立て、全国から集結した医療ボランティアの宿泊の手配を24時間体制で行った。自宅の水道は出なくなっており、風呂にも長く入っていなかったため、船内の海水蒸留の風呂がありがたかった。

自宅では、数ヶ月間、水道が利用できなくトイレの回数を制限し、配給水の節水、リサイクルに努めざるを得なくなったため、上水道、下水道の仕組みの一端が体験できた。自分及び家族には環境教育としての実体験が得られたと、良い方に解釈した。

夏場に震災が発生していたならば、衛生面で多くの問題が発生していたであろう。

(2)本業業務として

①倒壊した阪神高速神戸線の再建の是非の検討

倒壊した阪神高速神戸線について、平行して走る国道43号沿道の道路交通公害対策として、その復旧、再建の是非、復興計画の検討等を行っていた。

阪神高速神戸線は設置当初から、平行して走る国道43号と合わせて全国にも悪名高い、公害道路としてその沿道の 대기、騒音等の環境改善が論議されていた。

平成7年1月の大地震による未曾有の倒壊、平成7年7月の全国初の公害道路としての最高裁判決と立て続けに大事件が起り、現在道路環境改善の大きな渦中にある〔阪神高速神戸線の再建の是非議論はさまざまあり、本件では記述しきれない・・・〕

②事業場立入調査

震災後、工場・事業場が操業を継続、再開するにあたり、有害物質による環境汚染等の二次災害の発生を未然に防止するため、工場における原材料の薬品管理、処理施設の正常稼働等の立入り指導を行った。

正月の連休明けのこれからという時期の地震発生であったため工場の稼働、被災状況も目立った不備、事故はなく比較的平穏であった。

4. おもいつくままの教訓

①生活意識の変化

いくら高価な物であっても、天災が原因で壊れたのであれば諦めもつくが、人的な被害は癒されない。自分自身、家族、親類が幸いに人的被害が無かったことがなによりもよかった。復旧、復興により大きく変化するであろう神戸は今後も愛着を持ち続けられるよりどころとなる。

②震災復旧の生活変化

震災直後からの自分自身及び家族の心の変化、生活の目標を追ってみると、震災直後から1週間目までは、生命の安定、1ヶ月目までは、生活の安定、1年目までは、生業の安定を目標としてきた。

公式的には復旧目標時期は平成8年度末、復興は震災10年後の平成16年とされており、被災地の住居、市環境、交通ネットワークの大きな変化が予想される。

③不幸中の幸い

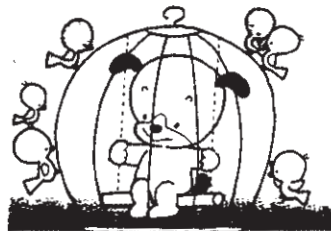
地震は、社会活動が休止している夜間、物の腐敗が少ない冬季、原子力発電所等大規模要監視施設が設置されていない地域に発生したため被災状況は地震規模、都市規模を考慮すると比較的限定された被害程度にある。

④環境教育の関連

震災により、ライフラインが欠落し、基本的な生活様式、物の有用性等が体験できた。自然の、驚異、不思議さから人と自然の共生の道をさぐるべく次代に伝えることの重要性を認識した。

5月10日~16日

あいろんしゅうかん
愛鳥週間



『高等学校での環境教育の実践事例』

兵庫県立社高等学校 教諭 田先 崇志

高等学校での環境教育の実践事例について、

1. 「学校・学年行事での取り組み」
2. 「授業（2・3年生）での取り組み」
3. 「部（自然科学部）活動での取り組み」
4. 「私（自分自身の研究も含む）の取り組み」を記述しました。

I. 学校・学年行事での取り組み

(1) 平成4年度に実施した環境教育は、

- ①、1学年の2泊3日（4月24日～26日）のオリエンテーション合宿（兵庫県関宮町・鉢高原）において、1年生400名と職員10名が半日間の「鉢高原クリーンキャンペーン登山」を実施した。各自がビニール袋を持って、環境を損なっている物を集めながらの登山であったが、多くのゴミを収集して地元の観光協会、ホテル・旅館の方々より感謝された。「少しずつでも集めれば多くのゴミ」になり、今後の生活で気をつけようともみんな確認した。
 - ②、5月2日に、「やしろ国際学習塾」において、やしろ国際シンポジウムⅡ「地域からの地球環境を考える国際会議」があり、1年生理数コースの生徒全員と希望者を参加させ、地球環境を考えさせる基礎を学習させた。
 - ③、2学期の11月5日に、全校生（1250名）に対して滋賀県環境生活協同組合理事長の藤井さんより、「地域からの地球環境を考える」と題する講演会を開いていただいた。日常生活での環境破壊につながる具体例をあげ、問題解決のためには地域からの地道な取り組みが大切であると訴える貴重な講演であった。
 - ④、11月11日と18日に、1学年（10クラス）で環境教育のL・H・Rを2時間実施した。1時間目は「地球環境問題の現状」、2時間目は「ゴミ問題」を取り上げて学習したが、学習の内容はビデオテープ学習、プリントによる学習が大部分であった。クラスによっては、「水を汚染しないプリン石鹸」を作ったりもした。
 - ⑤、3学期の3月19日に、本校の生徒会と1学年が中心となり、社町・滝野町の協力により「学園都市社町美化運動」の奉仕作業として、学校周辺・社町駅・滝野駅の清掃作業を実施した。作業は2時間で生徒400名と職員40数名が参加し、収集したゴミ類は、社町・滝野町のゴミ収集車に回収して頂いた。
 - ⑥、全校生徒・職員による除草作業（年3～4回）、毎月末の大掃除。
- 以上が、平成4年度に実施しました生徒の体験を生かした、環境教育の実施状況です。

(2) 平成5年度に実施した環境教育は、

- ①、2学期の11月9日に、環境教育の講演会を実施した。
- ②、3学期の3月22日に、2学年の生徒全員（400名）と職員40数名が社町の協力を得て、「学園都市社町美化運動」の奉仕作業を実施した。

II. 授業での取り組み（私立文系選択コースの生徒）

- ①校内の植物調査。春、夏、秋、冬（4回）
- ②校内のタンポポの調査。（西洋タンポポの分布調査）
- ③環境に関する小論文を書かせる。
各種の環境関係作文等に応募させる。（長期休業中・平常時の自宅での課題とする。原稿用紙は、担当の教諭が準備し、学校で一括して送付する。）
- ④水質の調査（地域の池の水・河川の水を調査する。）
2万5000分の1の地図に記入して、クラス全員に水質について検討する。

- ⑤水田の動物の観察。
学校周辺の水田の動物を観察して、季節・温度・湿度等の変化を知る。
- ⑥日常生活での環境実践の発表会。
学期に1回、自分の日常生活での環境に対する実践を報告し、他人の実践内容を知り、参考にする。
- ⑦将来のエネルギーを考えさせる。
クリーンなエネルギーを考えさせる。なぜクリーンエネルギーなのかを知る。
- ⑧環境教育を意図した自作データベース「RAIN」の開発。
1991年9月～1992年9月までの兵庫県南部の、降雨の各種イオンの分析結果をまとめ、データベース「RAIN」を作成した。兵庫県の身近な地域の自然環境、特に降雨についての理解を深め、身近な環境に興味・関心を持たせる。

成果

- ※ 環境の色々な事柄に関して、考える力を身に付けさせることが出来た。（日常生活・大学等の入試の小論文・面接）
- ※ 持参したゴミの持ち帰り、校内のゴミ類のカン・ビンの分類と、校内の焼却場へカン・ビン等を捨てなくなった。
- ※ リサイクルを考えるようになった。

Ⅲ. 部（自然科学部）活動での取り組み

(1) 実験・実習

- ①環境庁の「樹木の大气浄化能力チェック」
- ②雨水の調査
- ③気象観測……地震のデータも記録出来た。
- ④花粉の観測

(2) 野外観測

- ①天体観測
星空の透明度の比較（年に1回、山岳地帯と月に1回、学校の屋上等で比較する。）
- ②瀬戸内海の水質見学
淡路島青年の家 プランクトン・赤潮等の調査（春・夏休み）

Ⅳ. 私の取り組み

(1) 授業のない時間帯

校内・舎内の見回り。廊下・使用していない教室・便所の消灯＝節電、節水。

(2) 学年・授業担当クラスの生徒に、日常生活での節電・節水を。

学校での生活で教室・部活等と家庭生活で実行させる。

(3) 高校生の環境教育に関する意識の国際比較研究。

平成6年度 兵庫県教育委員会「教育研究論文集」

日本理科教育学会、第44回全国大会（平成6年、8月1日・2日、宮城教育大学）

(4) 中学校・高等学校・大学に於ける酸性雨データベースの活用。

日本理科教育学会、第44回全国大会（平成6年、8月1日・2日、宮城教育大学）

おわりに

高校生活3年間で、環境教育を取り入れた行事・授業をするとともに、高校生活が終了しようとする時期に、大きな災害に直面した彼らは、環境関係・都市工学・防災関係の学部へ進学をする者も増えました。

学校教育で、「自然を愛し、自然に学ぶ」本来の理科教育を復活させ、「人命を大切にし、自然と共に生きる、心の豊かな、人間を育成する」エネルギーと環境を考え、大切にすることを今後推進していきたいものです。

しかし、生徒に芽生えた環境問題に関する意識・活動をどのように家庭生活や地域に広げていくか、生涯教育・社会教育との連携などが今後の課題である。

「種の絶滅」(小浜由美子 ネットワーク『地球村』講師)

過去の地球の歴史の中で、全生物の大部分が絶滅した時期が何度かありました。しかし現在の種の絶滅は、過去のどの絶滅期よりも急速に進んでいます。1年間に4～5万種が減っているといわれています。一体なぜでしょうか。

過去の種の絶滅は、ある動物の肉、羽、毛皮などを狙って大量に殺していったことなどが主な原因でした。しかし現在は、生物たちの生存環境そのものを破壊することによって起こっています。

主なものとして森林の伐採、特に熱帯雨林の破壊が上げられます。地球上の生物の種は未知のものを含めて3000～4000万種といわれていますが、その大部分が熱帯雨林に生息しています。これらの森が毎年日本の面積の半分近く破壊され、FAO(国連食糧農業機関)は、このまま伐採が続くと100年以内に世界中からすべての森林が消える、と予測しています。

種の絶滅は実は私たち人類の問題でもあります。

森がなくなると、生態系が消え、二酸化炭素が増え、大気の浄化力が弱まり、水が減り、土壌が流れ出してしまいます。この現象が世界各地で見られています。生命のふるさとの森が失われると、他の生物だけでなく、私たちも生きてはいけません。

現在オゾン層破壊が進み、紫外線Bの照射量が増え、すべての生命の基であるDNAを破壊します。それによる生物の免疫低下、皮膚ガン、動物や人間の失明が世界で増えつつあります。植物も発芽細胞が被害を受け、収量低下を起こすことが実験の結果が報告されています。カエルの卵が紫外線Bの直射を受け、孵化率が急激に低下し、世界で激減しています。

地球温暖化も今後多大な影響を及ぼすでしょう。日本の環境庁の予測によると、100年後に日本の平均気温が3度上昇します。この急激な変化に生態系はついていけません。土の中の微生物、バクテリア、そしてミミズが死にます。土が死にます。土が命を育めなくなるのです。

私たちは日々何万という化学物質に囲まれて生活しています。多くの化合物は水に溶けず、魚、鳥、人間などの動物の体の脂肪に溶けていきます。五大湖でクロスビル(曲がったクチバシ)をもった奇形の水鳥が生まれたり、アメリカでは農薬のためハクトウワシの卵の殻が薄く壊れやすくなり、ワシの卵からかえらず、その数が激減しています。また農薬が体内に蓄積され、生殖機能を破壊するだけでなく、私たちの環境にも何十年も残留します。また工業物質は、免疫系を害し、日常的に使われている製品も神経を冒す物質を含んでいます。日常私たちがどれ程それらにさらされているか、ほとんどわかっていません。また複数の有害物質が混じりあったときに起こる被害について知るのはほとんど不可能でしょう。

私たちはどうすればいいのでしょうか。まず環境悪化をくい止め、無理、ムダな開発を止める必要があります。農薬や化学肥料の使用を見直し、有機農業、自然農法に移行していくことなどが求められています。次の世代、子供たちが安心してくらせる美しい環境をとり戻すため、できることから始めましょう。

関西ECOMAIL通信費納入者へのお知らせ

1. 1995年度会計報告(1996.4.30現在)

収入の部

項目	金額	備考
前年度繰越	6,505	前年決算：繰越=-18,435 預かり金=24,940
通信費	218,000	
雑収入	2,251	利子他
合計	226,756	

支出の部

項目	金額	備考
ECOMAIL・ワーク シヨツク案内 作成費	203,128	用紙・封筒・宛名ラベル代含む
振込手数料	6,300	105件分
諸連絡費	23,410	
事務用品費	7,824	
小計	240,662	
次年度繰越	-13,906	
合計	226,756	

以上、報告します。

1996年4月30日

日本環境教育学会世話人会

事務担当 西村優子

- 2. 貴会員納入状況**・・・ラベルに納入済みの最終年度を記入していますので、1996年度までの通信費を同封の払込用紙にてお支払いください。96年度納入者には払込用紙は入れておりません。最近払い込まれ、通知の未着で「未納扱い」になっております場合は、受け取り次第「納入扱い」といたします。悪しからずご容赦ください。

環境教育をヒトの原点で考える

山田卓三（兵庫教育大学）

1 環境教育の原点

植物でも動物でも生物はすべて個体の生存とその個体の子孫を残すために活動し、生活している利己的な存在である。この利己的な行動は「共存や共生」とか「環境にやさしい」といったこととは本質的に反するものである。人間が個体の生存維持のために食べる食物は植物か動物であり、それらはすべて生命のあるものである。したがって人間の生存は食物となる生物の犠牲の上に成り立っている。また、個体の生活のための排出物は多くの場合汚染、汚濁の原因となっている。

人間以外の動物は何千年といったタイムスケールをもって自分の体を環境に適応させて進化してきた。これに対して人間は文化、文明によって環境を変える方向に進んできた。もっとも人間が生態系から大きくはみだしたのは人類の起源という視点で見るとごく近年のことである。人が生態系からはみ出す要因は直立歩行により、両手が自由になり大脳が他の動物に比べ極度に大きく発達したことによる。大脳の発達の結果、自分を環境に適応させるのではなく環境を変える方向に進んだことにより、急激な環境の破壊をもたらした。

2 人間の特異性

動物の本性が利己的行動であるとするならばこれは環境教育の目指すものと相容れないものである。環境教育の原点は、利己的な本性的な行動を抑制し、他への思いやりの態度の育成にある。人間の大脳は他の動物に比べると極めて発達している。特に新皮質が発達し古い皮質は大脳の辺縁系といわれるように底部に押しやられたり、大脳半球の中に押し込まれている。この古い皮質には個体の維持と種族の維持、すなわち食と性をつかさどる中枢があり、新皮質には知覚、理解、認識などといった精神活動に関する中枢がある。そしてこの新皮質が古い皮質の活動を抑制する働きも持っている。動物は主に古い皮質で活動しているので種集団内の個体間にそれ程大きな差は見られない。ところが人間は新皮質の働きが大きいので、社会的文化的な影響を受け、個人差を生じ個人によってその行動は多様となっている。

動物には物欲とか名誉欲はないので人間のような蓄積とか、戦争といった闘争はない。動物の闘争はその個体と遺伝子の維持のためであり、空腹が満たされたり、配偶関係が成立すれば止まるものである。動物の闘争は点であり、線や面のように維持拡大することはない。人間は旧皮質の欲求を新皮質で抑制することができる。これが理性であり、環境教育はどちらかというと理性に基づいたものであるが、理性や知性だけでは行動を伴わないので感性の育成が平行して必要となる。

3 個と類の意識差

個は個人であり類は人類であるがこの間には様々なレベルの集団がある。それは家族、親族、学校、地域、市町村、都道府県、国、共和国、共同体などである。オゾン層の破壊とか酸性雨（霧）といった環境問題は地球レベルの問題であるとし、個人の問題としては意識しにくいものである。このように環境意識は利己的なものである。個人の生活を豊かにしようと思えばそれだけで消費するエネルギーは増大し、それだけ環境は悪化することになる。これは知性でわかっている生活の程度を下げることは困難である。また、人間は自分が豊かなときには他人を思いやる気持ちが生ずるが自分の生活が危ぶまれるような状況ではそれができなくなる。環境教育にはこれら原点を考慮した上で行う必要がある。

4 環境意識と理性および感性

環境問題の解決の方向は環境への理解と環境への思いやりである。言い換えれば環境の理性的理解と感性的理解である。ここでの感性は、生物学的本性としての基本的発現といった利己的な面を含まない人間としての望ましい感性である。

動物としてのヒトの基本欲は食と性と不快からの脱出である。この自己本位の行動は他との共存にはマイナスである。他との共存のためにはこの欲望を抑え他を思いやることが大切である。

環境へのやさしさにはその対象物をよく知る必要がある。環境に対する科学的理解とともに体験の積み重ねによって得られた知恵を大切にしたいものである。科学的知識と言えども万能のように思われがちだが自然界の事象は科学的にほとんど解明されていない。フロンガスが登場した時これこそ安全なガスだとされていたにもかかわらずオゾン層の破壊といった思わぬところに落とし穴があった。これを見てもわかるように科学の英知、人間の英知などありえないことである。環境教育にはまず体験的理解が必要でさらに科学的理解をその裏づけとする必要がある。

日本環境教育学会関西支部への協力事業ご案内

あつたろーろ

大量生産・大量消費・大量廃棄型のライフスタイルや経済活動を見直し、持続可能な社会を構築するために、あらゆる主体の環境保全への取り組みの参加が求められ、環境庁では1994年度より「環境教育シンポジウム」を展開しています。

こうした背景をふまえて、日本環境教育学会関西支部では下記の事業に協力します。つきましては多くの方々の参集をお願いいたします。

すいた環境教育フェア'96

—市民・事業者・学校・行政が共に手をたずさえた取り組みを—

日時：平成8年6月8日（土）10:00～16:00

<主なプログラム>

- (1) 取り組み事例発表ワークショップ（10:15～12:00）
 - ①「市民・事業者・学校・行政とのパートナーシップ」
 - ②「ビオトープとまちづくり」
 - ③「社会の仕組みとライフスタイルの変革」
- (2) 記念講演「環境と人の営みを見直す」（13:40～14:30）
道上 洋三（朝日放送おはようパーソナリティ）
- (3) シンポジウム

テーマ「共に手をたずさえて取り組むために」

- ①基調講演「かぎりある地球環境の中で生きる」

古沢広祐（国学院大学教授）

- ②パネルディスカッション「新しいライフスタイルとパートナーシップの形成」

パネラー（吹田市生活環境部）

（吹田市教育委員会）

（市民環境団体）

（消費生活団体）

（事業者団体）

植田善太郎（日本環境教育学会・学校教育ネットワーク）

古沢広祐（国学院大学教授）

コーディネーター 鈴木善次（大阪教育大学教授）

主催：「すいた環境教育フェア'96」実行委員会、吹田市

共催：環境庁（予定） 後援：大阪府ほか（予定） 協力：日本環境教育学会関西支部

会場：メイシアター（吹田市文化会館）



大坂城



交通：阪急千里線「吹田駅」前

JR京都線「吹田駅」より徒歩10分

*駐車場がありませんので、ご来場には電車・バスをご利用ください。

「パネル・ポスターセッション」(10:30~16:00)

*吹田市内の市民団体活動事例、近隣自治体等取り組み事例、学校関係の事例紹介など。

「ポスター展」(10:30~16:00)

*吹田市内の小・中学生による「水にやさしく、くらしにやさしく」ポスター展示ほか。

「コーラス」(12:45~13:25)

「野遊びフェスタ」(13:00~16:00)

*ネイチャー・ゲーム、草花あそび、竹細工など。

「リサイクル・工作」(10:30~12:00)

「環境教室」(14:30~16:00)

ほか。

問い合わせは：GEC(担当 岡村) TEL.06-222-3261 FAX.06-222-3262

タンポポから見た府下の自然環境がわかる大調査の報告

「タンポポが語る大阪の自然」 報告書完成

—1995年大阪府下のタンポポ調査報告— 定価 700円(郵送料込み1,000円) A4 40ページ判

申し込み先 〒531 大阪市北区豊崎2-4-5 岸本ビル2F

社団法人 大阪自然環境保全協会 タンポポ調査委員会

☎06-374-3376 ☎06-374-0608

郵便振込 00990-4-5567(社)大阪自然環境保全協会

★問い合わせ先

WORLD ENVIRONMENTAL
全国事務局
E N N A B I S T I N G
(財)日本環境協会

住所/〒105 東京都港区虎ノ門
1-5-8 オフィス虎ノ門ビル
TEL 03-3508-2654



1996年度 全国の小学生・中学生のみんな
こどもエコクラブに
集まれ!!

◆環境庁

会費滞納の方へ：発行・発送費用がもう残り少ないです。
会費が最高の収入源ですので、できるだけ、すみやかに
納入いただけることを切にお願い致します。

ネットワーク

日本環境教育学会第7回大会（滋賀）開催

大会会場 滋賀大学教育学部

5月11日 一般講演(71本) ポスター講演(11本) ; 懇親会

総会 ミニシンポジウム・ワークショップ(6会場)

5月12日 一般講演(68本) ミニシンポジウム(6会場)

記念講演 「自然界の実験-行動生態学からみた生物たち-」 日高敏隆(滋賀県立大学・学長)

「地球時代の新しい環境観と社会観」 内藤正明(京都大学工学部・教授)

以上のように開催されました。

問い合わせ ☎0775-37-7743(川嶋宗継)、☎0775-37-7852(服部昭尚)

滋賀県志賀町の酸性雨観測データ1996年版 完成

昨年に引き続いて阪口 進氏より上記のデータ集を送っていただいております。これで、94年から3年分のデータが揃ったこととなります。阪口氏の「おわりに」から少し引用しますと、

『(前略)…針葉樹だけでなく、ミズナラなどの広葉樹にも原因はわからないが立ち枯れが現れたと琵琶湖の北部地方から報告があります。このまま酸性雨が降り続けば日本もやがて、ヨーロッパや北アメリカと同じようになって行く恐れがあります。中国や韓国など近隣各国と協力し、対策を進めて行く必要があるでしょう。』

測定をはじめるときの目標の10年になりましたが、状況は10年経っても変わらず、近畿のみずがめと言われている琵琶湖に降る酸性雨の経年変化をみるために引き続き測定を続けて行こうと思っています。…(後略)』

阪口氏のポリシーが感じられるお仕事です。ご覧になりたい方は事務局まで問い合わせてください。



エントロピー学会関西セミナー {10周年記念公開シンポジウム} 「環境問題、環境倫理、環境教育」

(これらの分ち難く結びついた三つの領域を統一的に捉える枠組みを探る)

日時：1996年6月15日(土)午後1時30分～5時(1時会場)

会場：大阪府中小企業文化会館4階 43会議室 (地下鉄谷町線谷町9丁目駅または近鉄上本町駅から徒歩5分)

(大阪市天王寺区上汐4-4-25:☎06-771-4096)

パネリスト : 山内友三郎さん、鈴木善次さん(ともに大阪教育大学)

コーディネーター : 柴谷篤弘さん(京都精華大学前学長)

問い合わせ先：エントロピー学会関西セミナー事務局 プロット内 田中伸一さん ☎06-363-1297 ☎06-363-1298

(会計報告が4月末になっているため、今回の発行が遅れたことを恐らせてお詫言います)

関西 ECOMAIL

第31号 1996年5月10日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室) 気付

☎582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (☎&FAX 0729-78-3381[直通])

次回 第32号 1996年6月25日発行予定 原稿締め切り6月15日

(原稿は広報委員の植田善太郎まで、直接郵送かFAXしていただいてもけっこうです)

☎592 堺市浜寺石津町東2-3-35 ☎&FAX: 0722-47-2751)

